「予科練」第459号　令和2年7月1日発行〈隔月奇数月1回，1日発行〉昭和53年7月26日　第3種郵便物認可

予科練

No.459　令和2年

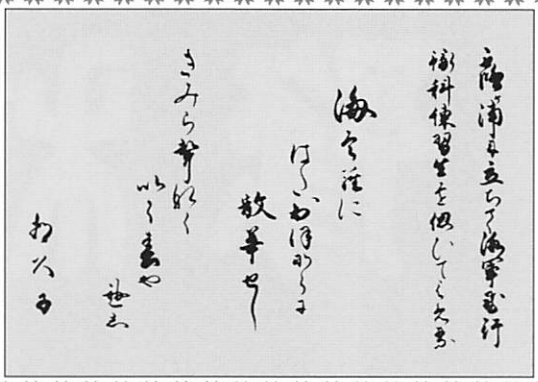
7・8月号

○連載《シリーズ海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑》No.1… 2
○連載《シリーズ海軍飛行予科練習生遺稿》…… 3
○名刺広告…… 4
○第53回予科練戦没者慰霊祭（献花式）…… 6
○三四三空隊史…… 7
○予科練の戦争　十七才の陸攻パイロット⑮…… 11
○突入・二七〇度・宜候…… 15
○私の昭和史…… 18
○寄付者芳名簿…… 23
○事務局日誌…… 23

公益財団法人　海原会

無断転載を禁ず

「豫科練の碑」が一巡しましたので、一番に戻り再掲載します。



高松宮妃殿下御歌

霞ヶ浦に立ちて海軍飛行予科練習生を偲びてよめる

海はらに
はたおほそらに
散華せし
きみら声なく
いく春やへし

この御歌は、高松宮喜久子妃殿下の御直筆で、有栖川流と申しあげ、妃殿下はその御宗家にあたられると承ります。

海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑　予科練の碑　No.001

豫科練誕生の地の碑

光る海　明るい太陽の下　大空をこよなく愛し　国を想うひとすじの少年たちが溌剌としてここに溢れていた　昭和五年六月一日　横須賀海軍航空隊の一隅に　海軍航空兵の教育機関として　横須賀海軍航空隊　豫科練習部が誕生し　やがて豫科練として愛称されるようになった　志願者の年齢は十五歳から十七歳　修業年限は三ケ年　俊秀なる大空の勇士は　英才の早期教育に俟つとの観点に立ってこの制度は創設され　全国五千九百余名の志願者から厳選された七十九名が　第一期生としてここに入隊した　顧みれば少年たちは戦いを求めてこの地に集まったのでなく　制空護国の一途の念いからであった　豫科練誕生から五十一星霜　若人たちの至純の赤心が祖国の安寧と世界平和の礎となることを祈念して旧学び舎の丘の上にこの碑を建つ

●建立年月日　昭和五十六年六月一日
この地に学んだ生存者一同
●撰　文　倉町秋次　海軍文官
●謹　書　浮田信家　海軍大佐
●所　在　地　横須賀市浦郷町五丁目
貝山緑地内
京急電鉄　追浜駅下車東へ
二粁

海軍飛行豫科練習生

遺書　遺詠　遺稿　辞世

遺書

海軍二等飛行兵曹

第十三期甲種飛行予科練習生

熊田孝一（福島県・十八歳）

母上様　孝一ハ皇国ニ生ヲ享ケシヨリ二十年ノ間、何一ツ孝ヲ尽クサザル事、幾重ニモオ詫ビ申上ゲ候。

然シナガラ此ノ度ノ如ク、回天特別攻撃隊千早隊ノ一員トシテ、帝国勝利ノ為ニ壮途ニツク栄、コレコソ何ヨリノ孝養ト存ジ居リ候。孝一ハ元気一杯、敵心滅ヲ期シ征途ニ就クハ男子最高の途ト覚ヘ、只々一途ニ邁進スル覚悟ニ御座候。更ニ御願ヒ致候事ハ、誠二ヲ立派ナ軍人トシテ大君の御為ニ奮闘スルベク、宜シク御教導下サル様御願ヒ申シ上ゲ候。末筆ナガラ御一統様ノ御健康ヲ祈リ、且ツ皆々様ニ宜シク御願申上候。　早々　乱筆ニテ失礼ナレド御許シ下サル様願上候

父上、母上様

昭和二十年二月二十日　回天特別攻撃隊・千早隊員として

伊号三七〇潜に乗り組み光基地を出撃　二月二十六日硫黄島海域で特攻出撃

暑中お見舞い申し上げます

（公財）海原会豫科練戦没者慰霊祭に於ける
海上自衛隊下総教育航空群の隊員による儀仗隊

公益財団法人
水交会

会長　赤星慶治
副会長　佐賀幾雄
理事長　杉本正彦
副理事長　河野克俊
専務理事　村川豊
事務局長　長谷川洋

公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会

会長　杉山蕃
理事長　藤田幸生
副理事長　岩崎茂
専務理事　石井光政

公益財団法人
海原会

理事長　菅野寛也（一般）
会長　小林和夫（乙19）
副会長　太宰信明（甲14）
副理事長　酒井省三（一般）
副理事長　安井剛（一般）
専務理事　平野陽一郎（事務局長）（一般）
理事　徳永三好（霞ヶ浦支部長）（甲13）
理事　保坂俊雄（広報担当）（乙23）
理事　篠田輝男（事業担当）（一般）
理事　山下桂子（一般）
理事　湯原豊一郎（一般）
監事　豊岡昭（甲16）
参与　行方滋子（一般）
参与　脇田四郎（甲13）
参与　早川昭二（乙21）

暑中お見舞い申し上げます

(公財)海原会・理事長
零戦愛好会・会長
菅野寛也
〒420-0865
☎〇五四―二四五―二五二八
静岡市葵区東草深町一―五

(公財)海原会・評議員
三重空甲十二期会・代表幹事
久保山賞一
〒116-0014
☎〇三―三八〇七―六〇二六
荒川区東日暮里五―六―一九〇九

(公財)海原会・評議員
予科練二十四期会世話人代表
岩舘芳雄
〒189-0002
☎〇四二―三九二―四五七一
東村山市青葉町三―三三―二八

予科練特飛十期会会長
佐藤建次
〒234-0051
☎〇四五―八四二―三六七二
横浜市港南区日野四―四三―一二

(公財)海原会・監事
土空甲飛十六期
豊岡昭
〒125-0052
☎〇三―三六五七―〇九七二
葛飾区柴又四―十三―十八

(公財)海原会・理事・広報担当
予科練二十三期会・会長
保坂俊雄(23)
〒182-0001
☎・FAX〇四三―四六―四七八八
調布市緑ヶ丘一―四四―一三

「人と自然が作る楽しい」茨城県稲敷郡阿見町

東洋一と言われた霞ヶ浦航空隊に、若き雛鷲の声がこだましました。

土浦海軍航空隊は、いま人口四万七千人の町の大きな歴史財産になっています。

阿見町は、現在福祉、緑の保全、生涯学習などに力を入れ、住民参加の町づくりを、積極的に進めています。

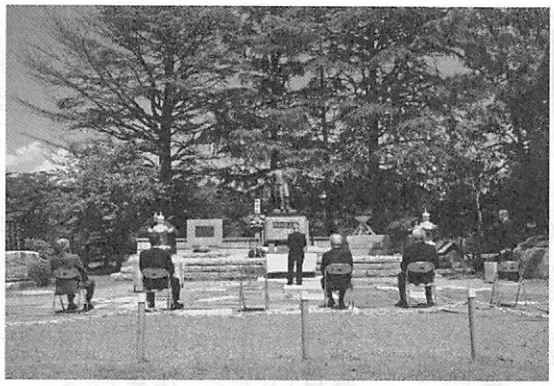
穏やかな霞ヶ浦、町中にあふれる桜の花が、今も静かに鎮魂の意を捧げています。

予科練の歴史を後世に奇与するため、阿見町は「霞ヶ浦平和記念公園」を整備し、平和のシンボル「予科練平和記念館」を建設し、開館しました。

平成二十二年二月一日

第五十三回 予科練戦没者慰霊祭（献花式）がしめやかに執り行われました

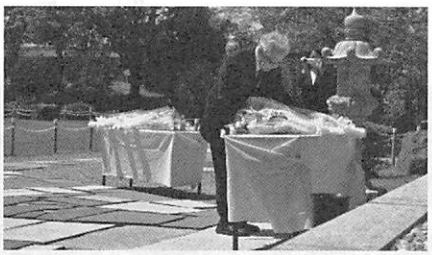
新型コロナウイルス感染拡大防止のために出された緊急事態宣言に対応するために、規模を大幅に縮小した形での、第五十三回予科練戦没者慰霊祭（献花式）が令和二年五月二十九日（金）午後一時、雄翔園予科練二人像の前で開催されました。



式は小林和夫会長（乙飛十九期生）、菅野寛也理事長、酒井省三副理事長、安井剛副理事長、徳永三好霞ヶ浦支部長（甲飛十三期生）及び平野陽一郎専務理事（事務局長）の六名が出席をして、しめやかに執り行われました。

小林会長が「コロナ感染防止のために、このような形で慰霊祭を行うことになりました。この国難を我々は一致団結してきっと乗り越えていきます。どうか、お見守りください。そして、コロナに立ち向かう日本国民に予科練戦没者皆様のご加護がありますように。」と予科練戦没者の英霊に報告した後、参加者全員が予科練二人像に献花を行い、その後黙祷をして戦没者の御霊をお慰めするとともに、コロナ禍の一日も早い終息を在天の英霊の皆様にお願いいたしました。

海原会理事会では、政府の緊急事態宣言の発出を受け、一時慰霊祭を中止すべきとの意見も出されましたが、このような日本国の一大事の時こそ、先の国難に一命をなげうって日本の礎を築いてこられた予科練戦没者の皆様のご加護を請い願い、参加者はたとえ一人でも二人でもいいから慰霊の灯は消してはならないという意見が大半を占め、「参加者を限定する。」「参加者は全員マスクを着用し相互の距離を2メートル確保する」、「自宅から会場への移動については公共交通手段は避けて、私有車での移動を行う」など、万全の感染防止対策を講じて実施することといたしました。



海原会会員の皆様、特に予科練同窓そしてご遺族の皆様には、慰霊祭への参加を楽しみにしておられたことと拝察いたしますが、「今を耐えて明日を待つ」、来年はきっとここ予科練の聖地雄翔園で皆様にお会いできることを信じて、第五十三回予科練戦没者慰霊祭（献花式）の開催報告とさせていただきます。

なお、本慰霊祭の状況は、海原会ホームページに動画をアップいたしますので是非ご覧ください。

（第五十三回予科練戦没者慰霊祭実行委員会）

三四三空隊史

二、編成前夜―前戦の人たち

太平洋戦争の天目山となったガダルカナルの争奪戦に勇名を馳せた「ラバウル航空隊」の奮戦は、海軍戦闘機隊の最後の晴姿でもあった。

それまでに培われ養成された戦闘機搭乗員の大半が死力を尽くして善戦の裡に散っていった。

生き残った人達は、新しい戦力養成のための教育部隊に転じた以外、大半は新設、再編部隊の基幹員として新鋭搭乗員とともに新しい前戦に配備されていた。

昭和十九年後半、米軍の反抗最前線がサイパンを超えて西太平洋海面の死命を制し始めた頃、比島は南方海域の最後の拠点として、「アイ　シャルリターン」に応えるべく、重大段階に入っていた。

昭和十九年十月、菅野直大尉（二十二才）は二〇一海軍航空隊戦闘三〇二分隊長としてマバラカット基地におり、その下に笠井智一一飛曹（十九才）が、そして同期の佐藤精一郎一飛曹は戦闘三〇一飛行隊員（鈴木卯三郎隊長）としてそこにいた。若い彼等にとって日々の戦闘そのものが同時に試練であり訓練であった。

十月十二日、台湾沖海空戦に彼等は比島から、戦闘七〇一紫電隊（一一型）は台湾から参加し、そのなかに老練松場秋男少尉もいた。

刀を返すように米機動部隊は比島に来攻し、十九日の邀撃戦で佐藤一飛曹は負傷入院した。その夜基地では、甲飛十期生の総員整列（十九才の若人三十名）があり、関行男海軍大尉を指揮官とする特別攻撃隊が編成され、海軍の歴史に厳粛重大なる一頁を刻むこととなった。たまたま菅野大尉は機材受領のための出張中で、内地でその事実を知り早々に比島に飛び帰った。

月末、戦闘四〇一、四〇二飛行隊（紫電一一型隊）はマルコット基地に進出し若冠山田良市大尉（二十一才）もそのなかにおり、同じく白根大尉率いる戦闘七〇一紫電隊も一部を宮崎に残して比島に進出した。

同じ頃、戦闘四〇七飛行隊長林喜重大尉（二十三才）も、卒業直後の特乙一期生（十九才）小竹等、小間孫七、蓮井光義、鈴木昭吉飛長等数十名を加えて鹿児島からアンヘレスに進出した。そのなかに若い予備学生出身の渡辺孝士、鳴瀬、河合少尉等もいた。かくて息つく暇もなく比島は敵の反攻を迎えて空、海、陸ともに凄絶な主戦場となった。

蓮井飛長はやがて特攻を志願し、林隊長から愛用の拳銃を与えられて袂別、マバラカットに移り、十二月始めの某日出撃したが、アパリ沖でグラマンと会敵、被弾してリンガエンに二機で不時着し陸路帰隊した。敵がサンフェルナンドに上陸したため、十二月二十七日トラック五台に分乗してツゲガラオに移った後、玉井司令、中島副長の命により、戦果確認の任務を帯びた零戦二十一機（松山少尉）の一員として高雄で高射砲の洗礼を受けた後、台中に着陸帰還した。一方松場少尉等はマルコット基地の僅か四機の紫電で、サンフェルナンド方面の単機強行偵察に当った後、陸戦隊として残られる舟木司令の命により、搭乗員四名で比島に袂別した。

（後日松葉少尉は、いずれ空の涯にと心に誓いながらも、残って戦う人達に対する心情は複雑であったと、言葉少なく語ってくれた）

内地では十一月末から十二月初旬にかけて菅野大尉、日光安治上飛曹、笠井上飛曹につづいて杉田庄一、酒井哲郎、飯田一上飛曹等が逐次比島から横須賀に到着し、戦闘三〇一飛行隊として、空技廠飛行実験部古賀中尉の指導で紫電改の慣熟飛行を始めていたが、宮崎少尉、沖本、大森、浅間、伊沢兵曹等が合流した下旬、加藤整備分隊長等と共に松山基地に移動した。

十二月二十五日、三四三海軍航空隊の編制が発令され、基地は松山と定められる。

昭和二十年一月一日松山基地

司令代行品川機関大尉
三〇一飛行隊　訓練八機（紫電一一型）
殉職　飯田上飛曹

右は当日の記録である。昨年末来四機目の事故であり、発動機の不調が目立っている。間もなく堀（三上）上飛曹も先任搭乗員として入隊した。

四〇七飛行隊は林隊長、成松整備分隊長以下既に出水基地で訓練中であり、比島方面で艦隊から帰ってきた大関、浅井、大沢各兵曹等は松山に辿りついて一息入れる暇もなく出水基地に向っている。

七〇一飛行隊は、宮崎基地から坂井少尉操縦、中島大次郎少尉搭乗の九〇機練が雪の佐田岬を通過して松山に移動し、既に入隊している隊員に合流したが、一月八日隊長鷲渕孝大尉（二十四才）の着任を迎えて、魚が水を得たように訓練飛行を開始した。

十四日　飛行長志賀淑雄少佐着任

十五日　司令源田実大佐発令

十九日　源田司令は准士官以上の出迎えを受けて着任された。黙々と報告を受け、言葉少なく語られ余談なし。要の堅い扇の如く空気俄かに引き締まる。夕食後の一刻、士官室で隊長達と語られる笑顔は慈父のようであった。

二十六日、林隊長以下四〇七飛行隊はダグラス二機とともに出水より松山に合流し、そのなかに甲十期で既に台湾高雄、大岡山と連戦の経験を持つ中尾（原田）上飛曹の外十一期の四枝、竹島、渡辺、松井一飛曹等もいた。そして即日訓練を開始した。

その頃、司令の要請により司令付として、予備学生出身の武田彌兵衛少尉の外に四〇七飛行隊からはピカ一の渡辺孝士少尉が出向したことは、林隊長の人柄を物語る一面でもあった。

二月一日　偵察第四飛行隊編入
副長相生高秀中佐発令

九日　副長中島正中佐着任（一・一八発令）

十日　第三航空艦隊直属　戦斗四〇一、四〇二飛行隊編入さる。

（この日米軍硫黄島に上陸）

十二日　偵四飛行隊長橋本敏男少佐着任

かくして三四三空の陣容も漸く整った。

三、三四三空剣部隊

司令は着任以来、各科の長にそれぞれ指示を与えられる外、特に隊長、分隊長に対して思想統一を図る機会を持たれて来たが、陣容が整った二月中旬、准士官以上に対して『誓って制空権を獲得し、戦局の挽回を期す』と不動の決意を示され、准士官以上は断髪し、総員各自が頭髪と爪を切って小箱に入れて遺骨代わりとして備えるように指示された。

既に七〇一は維新隊、四〇七は天誅組、三〇一は新選組と称して各指揮所に看板を立て意気旺であったが、司令は三四三空を剣部隊と命名された。偵察四飛行隊も奇兵隊と称して幟を立て、全隊の志気は日を追って昂揚した。

四〇一飛行隊は極天隊と称して徳島において訓練を開始した。工作科は指揮所宿舎の分散設置等、松山基地を司令の意図通りに築城し、整備科は分散整備補給態勢の完成に、通信科は在来の航空隊の常識を越えた器材の調達、情報蒐集、整理機能の拡充に、それぞれ夜を日に継いで止まることを知らず、特に横空、空技廠の指導協力を求めて戦闘機電話機、二十粍機銃の性能の全巾発揮のための顧慮が払われた。

三月一日　硫黄島遂に玉砕

戦闘四〇二飛行隊は、二十日間の名目上の在籍のまま六〇一空に編入替となり離脱す。

出始めの遅れていた維新隊も既に八対八の編隊空戦に移り、勇壮そのものの編隊離陸では、各飛行隊が如何にして早く集合するかを秘かに競い工夫する姿が見えていた。それ等は司令と各隊長の間でガッチリと統一された思想の下に、それぞれの性格なりに統率された各飛行隊の闘志と若さによるものであり、また一つには松場、宮崎、大原、本田、堀（三上）、田中、指宿、

下鶴、杉田等各老練パイロットが若い隊長、分隊長にピッタリと従って若い搭乗員を指導し叱咤したためであった。

一月着任した飛行長は各隊長を観察し、分隊長以下の気風を見て、若い彼等が自分達とちょっと違ったものを持っているのを感じとった。それは訓練されて実戦に入っていった人達と違って、翼が生えるか生えないかの姿で戦場に投入され、斗志と若さで戦場を乗り切り、体験し、戦運に恵まれて銃火の洗礼のなかで育って来た若者の姿であり、これから同じ道を辿って行こうとするパイロット達であった。

『何も言うことはない。司令と直結させてもっぱら二千馬力が、二十粍四挺が一機でも多く動くように、彼等が飛びやすいようにひたすら努力する現場監督に徹するに如かず』と心に決めていた。

四、初陣

司令としては、後一ヵ月は訓練期間を持ちたかったようである。が戦況はそれを許さなかった。

三月十七日、敵機動部隊四国南方海面に接近し、翌十八日敵は九州南部に来襲した。

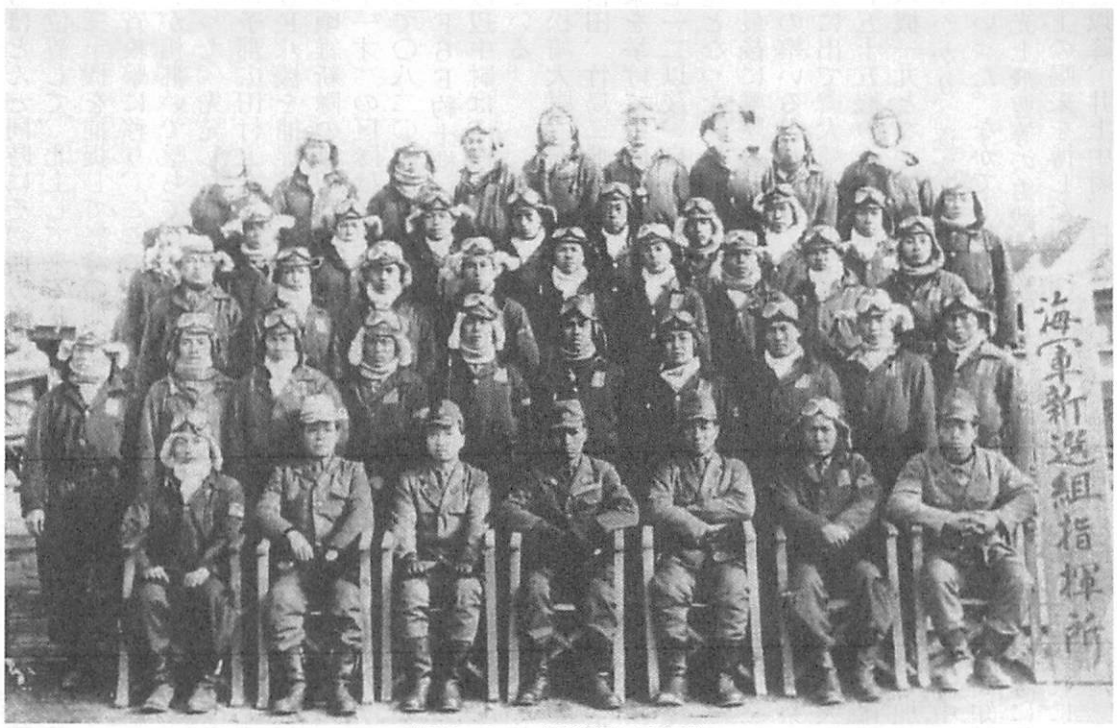
司令は、明朝敵は呉軍港来襲と判断され、各隊、各科明早朝に向かって万全を期して準備に入った。

司令は一睡もされない。これに従う中島副長以下、それぞれ気を配って水も漏らさぬ構えに集中した。

三月十九日〇五〇〇搭乗員整列内海地平なお暗く、島影未だ見えず、東方山脈の稜線のみクッキリと浮かぶ。

〇五四五　彩雲二機、続いて一機発進し四国南方海面の索敵偵察に向かった。発進の後はそれぞれ単機となって、敵空母の想定海域に向かって先拡がりに、指定された扇形線上を黙々と飛んだ。

（彩雲は誉一一型エンジン一基を搭載する三座の高速機で中島飛行機製の新鋭であったが七七粍旋回機銃一基という軽武装で防弾装備は一切なかった。）



戦闘三〇一（新選組）飛行隊

その第一の任務は、進攻して来る敵飛行機群第一波の発見報告であり、各機は概ね足摺岬と室戸岬を結ぶ線上において、南方海域から北上して来る敵を把握するはずであった。

果せる哉、〇六五〇、高田満少尉を長とし影浦博上飛曹を電信員、遠藤稔上飛曹を操縦員とする彩雲一一型（三四三ー四号機）から「敵機動部隊見ゆ、室戸岬の南三〇浬」の第一報が入電し、「全員即時待機」が下令された。

続いて「敵大編隊四国南岸を北上中」の入電に接し、「全機発進」が下令された。

半時前、搭乗員整列で「古来、これで充分という状態で戦いを始めた例は一つもない。目標は敵戦闘機」と簡にして凛とした司令の訓示を胸に、闘志満々の各隊は堂々と相次いで離陸し『充分な高度で隊形を整え終って、一呼吸してから長くても十分以内に会敵させれば最高』と、かねてから念願された源田司令の作戦理念は茲に実現し、緒戦の勝機を掌中にされたのである。

それは厳流島の決闘における宮本武蔵の「小次郎敗れたり」の上を行くものでもあった。

かくて松山基地見張員が上空に敵編隊を発見し、地上から無線電話で「敵編隊、飛行場南西、高度四〇〇〇」と通報した時は、既に直掩隊山田良市大尉も発見しており、上空支援の位置を占め、総指揮官戦闘七〇一隊長鴛渕大尉からは「我既に敵を発見、空戦に入る」と平素と変わらない明るい張りのある声が無線電話で地上に返えってきた。

敵は多い。翼を拡げ列をなして堂々の進撃であった。

既に山田直掩隊支援の下、維新隊十六機は整々果敢の編隊攻撃に入り、各機二十粍四挺の弾雨を集中する下で、F6Fが一機また一機と火を噴きながら編隊から脱落して行く様は、正に念願の快挙であった。それはまた、かつて零戦隊が太平洋を制した往時の姿が、今ここに甦るかの如き紫電改初陣の姿でもあり、司令以下粛然として空を注視し、一同暫し無言であった。

天誅組林隊長の率いる十六機もほとんど同時にその西方海上に位置して、北上して来るF6F三十機を捕捉して怒濤の如く一斉攻撃に移り、ここでもF6Fが相継いで墜ちて行く有様であった。先発した市村隊四機は伊予郡広田村上空に別動してF6F八機を捕捉撃破したが、その頃維新隊の渡辺幸博中尉（二十一才）の区隊は、更に敵を求めて〇八二〇中山町西方海上からF6F約十機に攻撃をかけ、渡辺中尉は一機撃墜の後自爆している。

松崎大尉、石川、遠藤上飛曹、信田、竹島二飛曹はそれぞれ戦果を挙げて中山町西方海上で〇七一二以後、自爆あるいは未帰還となった。

最後に離陸した新選組菅野隊長の率いる十八機は、飛行場東方に出て、大崎上島上空にF6F五十五機の一群を捕捉し、十八機一丸となって猛烈果敢に降りかかり、逐次血祭りにあげていった。なかでも杉田、加藤、日光上飛曹等の勇戦は物凄く、地上の喝采を博したが、〇七一五以降、井上中尉、日光、久保上飛曹が自爆あるいは未帰還となり、菅野隊長は被弾して落下傘降下し、地元住民の手厚い応対と手当を受けて陸路帰隊した。尊い犠牲は地上にも起った。〇八二〇空襲の合間を縫って着陸した林隊長が下鶴、中島上飛曹を率いて出撃すべく補給を急いでいるとき、突然F4Uの一隊が地上銃撃に入って来た。退避の下令、地上銃火の応戦のなかで既にエンジンが唸っていた中島満夫機の車輪止めを外しにかかっていた北川孝四郎二等整備兵曹も必死であった。その瞬間、敵機の弾幕は地を這って迫り、中島上飛曹は機上で、北川二整曹は翼下で壮烈な戦死を遂げた。

空では、緒戦敵情の第一報を打電した彩雲隊の一機（三四三ー四号機）は、さらに偵察を続けている裡に、四国西部大半に拡がった敵機往返の空域に捲き込まれ、発動機の不調も加わり、敵戦闘機の集中攻撃の渦中に文字通り孤軍奮闘の末、高知県高岡郡津野村上空で敵編隊に体当りしてその二機を道連れに、凄絶きわまる自爆を遂げた。

これを目撃した地元の人々は、その地に塔を建ててその功を讃え、三十余年を経た今日も村人達は頭を下げて塔を過ぎるという。

【布告】

偵察第四飛行隊
海軍少尉　高田満
海軍上等飛行兵曹　影浦　博
海軍上等飛行兵曹　遠藤　稔

右ノ者彩雲搭乗員トシテ昭和二十年三月十九日四国南方海面ニ来攻セル有力ナル敵機動部隊ニ対シ飛行機前程哨戒ノ任ヲ以テ出撃スルヤ敵部隊ヲ土佐沖ニ捕捉熾烈ナル防禦砲火ヲ冒シテ触接シ克ク其ノ全貌ヲ明ニシ爾後ノ作戦ニ寄与スル所大ナルモノアリシガ偶発動機不調トナリ帰投ノ途次敵戦爆連合艦載機数百機ノ編隊ト遭遇シ勇戦力闘セルモ遂ニ人機共ニ被弾シ帰投困難ト知ルヤ猛然敵編群ニ突入必殺ノ体当リ攻撃ヲ敢行シ克ク敵二機ヲ粉砕撃墜シ悠久ノ大義ニ殉ジ皇軍真髄ヲ発揮シタルハ其ノ武勲顕著ナリ仍テ茲ニ其ノ武勲ヲ認メ全軍ニ布告ス

昭和二十年八月十七日

連合艦隊司令長官
小沢治三郎

地上では、夜を徹して司令を補佐した中島副長、黒葛原通信長、橋本偵四隊長、伊奈中尉の外、渡辺、武田予備少尉等は睡魔を忘れて情報の整理、指令の伝達に忙殺され、紅顔の掛川兵長（十七才）等は戦闘機無線電話にしがみついて夢中で声を渇らしていた。

川崎整備長はじめ辻野、成松、中津留各整備分隊長は一機でも多く飛ばせたいとして徹夜の努力にひき続き、敵機の銃撃の下、補給収容と待避を繰り返えし、工作科員もこれに協力するなかで、野口主計長、鈴木副官等は隊員の給食、戦闘経過の記録に忙殺されながら戦況の推移を追っていた。八時を過ぎる頃から野村軍医長、西沢軍医大尉も限られた看護兵を鞭励しながら負傷者の搬入処理に忙しく、七日前着任したばかりの古賀機関大尉は自ら当直将校の役を買って出て応急全般の指揮にめざましい奮闘であった。

続く

予科練の戦争

久山　忍　著

十七才の陸攻パイロット⑮

甲飛十二期　海軍一等飛行兵曹　青井　潔

自　立

シンガポールでの魚雷発射訓練から帰った五月のある夜、兵舎にいる私に電話がかかってきて、

「シンガポールのセレター基地まで要務飛行せよ」

と主操を命ぜられた。初の実戦飛行である。私はそのとき十七歳であった。今の時代では車の免許もとれない年齢である。その若さで第一線の爆撃機を操縦するのである。しかも訓練ではなく実戦である。

（いよいよ来たか）

と身震いする。

（ようし、やったるぞ）

と腹を決めた。多数の新米搭乗員から私が選ばれた。そのことに驚いた。そして、もうそんな時期が来てしまったのかと当惑した。

前の晩は緊張することもなくよく眠れた。いつものとおり飛ぶだけだ、私は十代の新人であったが、自分の腕を信頼していた。同乗する搭乗員も優秀な人ばかりで心強い。搭乗する機は今まで一度も不調を訴えたことがない九六式陸攻である。大丈夫だ。自信をもってやろう。私は自分自身にそう言い聞かせた。

それにしてもよくぞ私を選んだものだ。私は日本海軍最年少の陸攻操縦員である。まだ経験のない少年であることは一見してわかる。それだけに同乗する搭乗員たちも不安があるであろう。そうであればこそ私は自信満々の演技をしなければならない。他の搭乗員に不安がられまいという心理が強かった。

それとともに「どんなもんだい」と鼻息も荒かった。故郷の岐阜で毎日勤労に汗している同級生たちに主操の席に座る私の

姿を見てもらいたいと願ったりもした。

要務飛行の内容はさまざまである。要人の送迎、連絡、転勤者の送迎、乗組員の送り、受領部品の引き取り等である。

さて出発である。訓練のとうり離陸する。アエルタワルを離れると機はほぼ一七〇度の方向に進路をとる。高度は天候がよければ五〇〇メートルくらいにとり、右手にマラッカ海峡の青い海を望みながら陸伝いに南下する。

途中、タイピン、イポー、クアラルンプール、クルアン、バト、バハ、ジョホールを経てセレター基地にむかう。セレター軍港に進入すると下にマレー半島の緑地を眺め、右下にマレー半島の沿岸線とマラッカの海がみえてくる。視野が良ければ遠くにスマトラ島の山々もみられる。

本土では沖縄戦のたけなわである。日本軍は、制空権、制海権も完全に敵に握られているなかでの劣戦を強いられているというのに、なんとのどかな飛行であることか。十分な見張りは行なっていたとはいえ、息を詰めるような緊張感はなかった。

私は今、自分の細腕一本でこの九六式陸攻を空に浮かべている。乗員の運命も私の腕次第である。

飛行は順調であった。男一匹空を往く。この誇り、満足感、他に比べるものなしの心境であった。

セレター基地が見えてきた。私は落ち着いていた。セレター基地への着陸はいつもどおり難なくできた。一一空の同期生が見ている。同期生たちの前で腕を見せることができた。晴れがましい気分だった。同期生とはありがたいもので、機を見ると声をかけて走りよってくれた。

それから幾度もの要務飛行の操縦を命ぜられた。私は自信を深めて一人前のパイロットになった気持ちでいた。しかし、周囲からみると私はまだまだ子供に見えたようだ。

機を離陸させるとき、後方にいる飛行長に対し、

「飛行長、離陸しまーす」

と申告する。ある日、原田中尉から、

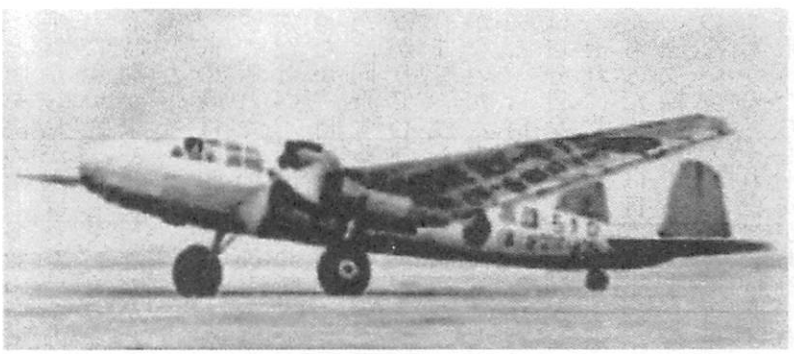
「青井、渡辺飛行長がな、『青井に、飛行長離陸しまーすと言われると、お父ちゃん離陸しまーすと言われているような気がする』と笑っていたぞ」

と言われた。渡辺飛行長は、鬼瓦のような怖い顔で士官搭乗員に恐れられていたが、父親のような気持ちで私のことをみていてくれたのである。そのことを思うと涙が出そうになった。

バリックパパン攻撃

さかのぼること、昭和十七年一月の末、日本軍が油田のあるボルネオ島のバリックパパンを占領した。すぐさま高雄の航空隊の陸攻二十三機が進出し、バリックパパンは我ら陸攻隊の重要な中継基地となった。

ところが、昭和二十年七月になると米軍が逆上陸して奪い返されてしまった。港と飛行場を押さえた米軍はたちまち基地を整備し、傍若無人にも夜になると煌々と電灯をつけ、まるで戦争が終わったかのような観を呈しているという。日本軍の航空隊は完全になめられているのである。なんとか意地をみせたい。一矢報いたい。そこで白羽の矢が立てられたのが、三八一空（ジョホール基地）の残存の陸攻隊である。



九六式陸上攻撃機

我々一三空の残存機もジョホール基地に進出し、三八一空の指揮下に入ってバリックパパン攻撃に参加することになった。

当時の三八一空の稼働機は、一三空の機数を含めても一式陸攻が三機、九六式陸攻が十数機程度であった。このうち、バリックパパンに選出された攻撃機は四機である。

私は五番機の操縦員に選ばれた。私はバリックパパン攻撃のメンバーに選ばれたことをアエルタワル基地で知らされた。五番機は予備機である。五番機の操縦員は一番若手の私と加藤である。主操、副操を決めず二人で交互に操縦せよと指示された。

予備機といえど必要があれば攻撃に参加する。とはいえ、その可能性は少ない。そもそも私などのひよっこパイロットが実戦で使い物になるはずがない。

我々が五番機に選ばれたのは、次回の攻撃に備えて先輩の戦いぶりを見ておけという趣旨であった。

バリックパパン攻撃に出撃するにあたって私は悲愴な気持ちになったという記憶はない。自分が予備機に乗っていくのだという気安さがあったからでもあるが、それ以前に私はアメリカ軍の脅威も知らず、戦闘に対する認識も甘かった。実戦にでる緊張感よりも自分が飛行機を駆って長躯シンガポール、ジャワ、場合によってはバリックパパンへ飛ぶという長旅の期待に胸が躍っていた。ようはまだ子供だったのである。

ジャワは治安が良く物価も安い極楽である。という話をジャワで飛練教程を終えた甲飛十三期生たちから聞いていた。ジャワは我々にとってあこがれの地である。そこへ行けるかもしれない。命を捨てに行くなどという不安や恐怖は持たず、物価の安い町で腹いっぱいうまいものを食うのだという期待と欲望しかなかった。

あろうことか私は、アエルタワルで待つ戦友たちにジャワでお土産を買ってくるという約束までしていたのである。まことにのんきなものであった。悲痛な決意で機に乗り込む先輩方からすれば私の能天気ぶりは嘆かわしいものであったろう。

生きて帰って来たのだから今では笑い話ですむが、現実にはいつ死んでもおかしくない地獄の淵を通ってきたのである。今ふりかえるとぞっとする思いである。

昭和二十年七月十八日、アエルタワル基地から、一三空の一式陸攻と九六式陸攻が別行動でジョホール基地（三八一空）へ進出した。別行動をとったのは両機の速度がちがうからである。九六式陸攻の主操は私である。

ジョホール基地はマレー半島の先端にある基地で、当時は戦闘機隊の一部が飛行場を使用していた。

滑走路は東西に一本しかない。長さも一三〇〇メートルそこそこである。しかも飛行場そのものが台地にあるため、標高差も加味して着陸しなければならない。現在のように地上の管制塔によるいたれりつくせりの指示などない。ジョホール基地への着陸は今回が初めてである。様子が分らない場合には滑走路すれすれまで降りてからやり直しをする。そして二度目に慎重に降りる。これが先輩から教えられた方法である。ジョホールではこのやり方でうまく着陸することができた。

しかし、ジャワに向かって飛び立つときは爆弾を積んで重装備になる。離着陸のやり直しがきかないため、よほど慎重にやらねばならない。私はひそかに気をひきしめた。

目指すはジャワ

昭和二十年七月二十一日、午前十時、ジョホール基地の滑走路を一番機から離陸を開始した。

二番機、三番機、四番機、・・いよいよ私の番だ。ブレーキを引いて機を固定し、操縦輪を後ろに引いてエンジンを全開、ものすごい爆音とともにブレーキをかけられた機体が前に出ようとしてつんのめるように全身を震わせる。

頃はよし。パッとブレーキを外すと同時に操縦輪を前に倒す。するすると走り出した機にぐんぐんスピードが加わる。滑走路

の中間まで来たがまだまだ速力は十分ではない。日頃の軽装備であれば乗用車のダッシュのような加速をするが、重装備の今日は砂利トラックの走り出しみたいに鈍足である。機体の重さをずっしりと操縦輪に受け止めながらじわじわ加速していく。滑走路の先端がどんどん迫ってくる。でも大丈夫、離陸の自信は十分にある。若い操縦員にとってはなにもかも新しい経験だ。緊張は隠せない。しかし私は落ち着いていた。

滑走路が残り一五〇メートルぐらいになったところで車輪がわずかに浮いた。そのまま操縦輪を押さえ気味にしたままでなお突っ走った。そこで車輪が浮き上がり、機体が滑走路をかわして宙に浮いた。やがて緑したたるジャングルが眼下に広がった。離陸がうまくいったのである。

しかしまだ安心できない。まだまだこのまま直進だ十分に機速がついたところで高度を上げながら左にゆっくりと旋回し一番機を追う。

機速をつけることと徐々に高度をとることに集中していたため、気が付いたときにはジョホール基地を左後方に遠く引き離し、シンガポール島北端の上空まで来ていた。もう大丈夫。後は一番機を目がけて高度を上げていくだけだ。エンジンを増速してぐーんと機首を上げる。みるみるうち一番機が前上方に大きく迫る。

予定飛行時間は六時間、距離は一〇〇〇キロ以上、目指すはジャワ島のマジウン基地である。

天気晴朗、一点の雲もなく視界は良好、眼下にはリアオ諸島がゆっくりと後方に流れていく。九六式陸攻の巡航速力は一三〇～一四〇ノット。高度二〇〇〇メートルになると眼下の地形の流れもそれほど速くない。

前方を見ればまさに赤道直下、カリマタ海峡の青い海がどこまでも広がっている。太陽の日差しが強い。熱帯の太陽がまぶしい。海の青と島の緑の鮮やかさは眼も覚めるばかりである。

まなじりを決して南を目指す我が機は重武装の攻撃隊である。大自然の美しさは人間の姑息な営みなどどこ吹く風とばかりにあくまでも美しい。このまま我々の飛行機は悠久の美の中にむかって呑み込まれそうである。

時は昭和二十年七月、沖縄は完全に敵の手に落ち、日本の都市は東京、横浜、大阪、神戸、名古屋、その他の地方都市に至るまで焦土と化していた。

四六時中、本土上空に敵機の影を見ないときはない。

敵の兵力が日本に集中しているため、我が機が飛ぶ南方の空に敵機を見ることはまれである。

しかし油断はできない。私の五番機も、いつでも交戦できるよう機銃に弾丸を装填し、機体（背中と両腹部）から空に向かって銃口を突き出している。とはいえ海は美しく、あたりはのどかである。我が機の飛行は順調である。すでにリンガ泊地があるリンガ諸島を過ぎた。

やがてずっと前方の水平線にすり鉢を伏せたような形の山らしきものが見え隠れし始めた。あれは山じゃないか、陸地じゃないか、と思っているうちにまた一つ、そしてまた一つ同じような形をした山が見えだし、やがて横一文字に点々と並んで見えてきた。まぎれもなく山だ。ジャワに近づいたのだ。

近づくにつれて裾野もはっきり見えてくる。なだらかな陸地もうっすら視野に入ってきた。

（いよいよジャワだ）

あと一時間足らずでマジウン基地に着陸である。

しばらくするとジャワ海が尽きてジャワ島の上空に進入した。機から地上を見下ろして驚いた。マレー半島やシンガポールとちがって赤土がない。土の色が日本の農村と同じなのである。これは土地が肥えている証拠である。その土が隅から隅まで耕されている。斜面には日本と同じように段々畑まである。そこここで畑を焼いているのか、薄い煙があちこちからたなびき天に昇っている。

午後四時過ぎ、西日に映えた豊かなジャワの田舎はいかにも長閑であった。マジウンが近い。着陸はもうすぐである。目的地がもうすぐ見えてくるというの

で機内がざわめいている。
ついに見えた。広い野原に一本の素晴らしい滑走路が東西に走っている。さあ、いよいよ着陸だ。あと一息の頑張りだ。
一番機がバンクを振って編隊解散を知らせる。一番機と二番機がつぎつぎと滑走路に滑り込んだ。マジウンは初めてである。しかも今回は二五〇キロの三一号爆弾を抱いている。
この爆弾は途中で頭部をスパッと切り落とした形になっている。近頃日本が開発した爆弾で、落ちるとその四〇〇メートル周辺を焼野原にする凄い破壊力を持っているという。この三一号爆弾を敵地の上空から落とせば奴さんたちきっと驚くぞと、我々は期待に胸を膨らませていた。
ところがこのころアメリカではネバダの砂漠で原子爆弾の実験にとりかかっており、半月後には広島に第一弾を投下することになるのである。
むろん、そんなことは知る由もない。いずれにしても爆弾を積んだ機での着陸は命がけであった。
下手な着陸をすれば我々は機体ごと吹き飛んでしまう。
第四旋回がおわってパスに乗った。どんどん高度が下がって滑走路の手前の草原が後方に流れ、やがてそれも切れて機が滑走路に入った。
着陸の条件はオーケー。いつもより機体が重いのでスピードはやや出し気味だがこのまま着陸しても差し支えない。降下を続ける。やがて激しい振動が体に伝わった。無事に着陸できた。
（うまくいった）
ふう、と息をつく。直ちに地上誘導員の誘導に従って飛行場の外れのヤシ林の掩体壕にむかう。途中、竹藪が多い。ふと日本の田舎を思い出す。
エンジンを最微速にしぼって方向舵だけの操作で狭い道をクネクネと進む。途中で年配の整備兵や銃を持った番兵が唖然とした顔で私を見ている。
あまりにも若い搭乗員に驚いているのである。そのとき私は十七歳と十カ月であった。今の高校三年生の夏の頃の年齢である。

続く

突入・二七〇度・宜候

甲飛一期生　佐々木昌直

雲中からの脱出—帰投

雨は小降りになり、機の動揺も小さくなってきた。
じっと見つめていた光源がぼけてすこし拡大したと見る間にスーット消散してしまった。
「どうしたんだろう？変だ！」
私の気持ちが動揺した。途端、思わず「アッ！」と叫んだような気がした。
暗黒から光明のへのドラマチックな一瞬の転換であった。
「脱出したんだ！無事帰投出来る」
ようやく我にもどった私は、視界の広がる環境を実感し、その感動に身の震えを禁じ得なかった。
われわれを歓迎するかのように、浜炎を噴き上げる花咲山が眼前にあった。
原兵曹に燃料残量を確認した私は、機首を西飛行場に指向しスロットルレバーを押しだした。海底に沈む運命から逃れることができた三七四号機は、喚起の爆音をラバウル湾口にまきちらしながら、私の意を汲んで上昇をつづけた。
今脱出してきた後方を振り返ると、依然として折り重なる密雲が、不気味さをたたえ、憎々しげにニューアイルランド島を覆い隠して、いっこうに弱まりそうにない。
ラバウル湾付近は、雲高が一五〇〇メートル程度まで上がり陽光を遮ってはいたが、視界は十分開けていた。雨も止んでいる。
湾内には大小の艦船が投錨し、頼もしく偉容を誇示している。姉山を背に湾岸まで市街が整然と原色の屋根を連ね、東岸の東飛行場には三十機ほどの零戦が翼を休めていた。
いつの間にかペア全員が操縦席付近に集まり、活気を取り戻し笑顔で「良かった」と互いに手をとり合い、隠しようもない

喜びにひたっている。その様子を見た時、私は万感錯綜し自責の念にかられた。

責任ある機長として主操縦員の立場にありながら、まかり間違えばペア全員を死においやるところであった。

奇跡的に最悪事態はまぬがれることができたというものの、軽率にパイロットの常識を無視し、安易に自分の技量を過信して魔の積乱雲に突入した暴挙は、大きな過失であり恥ずべき行為であった。

「不時着するといった機長が、その気がなくなったように飛びつづけたときは、何がおこったのだろうと不思議に思った」

「機長にだけ見えた灯というのは一体何だったのだろう」

皆の話題はその疑問に集中し、私に解明を迫るが、私として確答できる根拠は何もない。不時着直前に超自然の力が働いて、いつしか機を光源に向けてしまった事実だけである。

敢えていえば「魅入られて」とでもいうほかないだろう。

しかし、それではあまりにも無責任であり、主体性のない話しで、好ましくないと判断した私は言うことを控えた。

だいだい、幻想的この言葉には信憑性も説得力もなく幼稚過ぎる。戯言と一笑に付されるにちがいない。

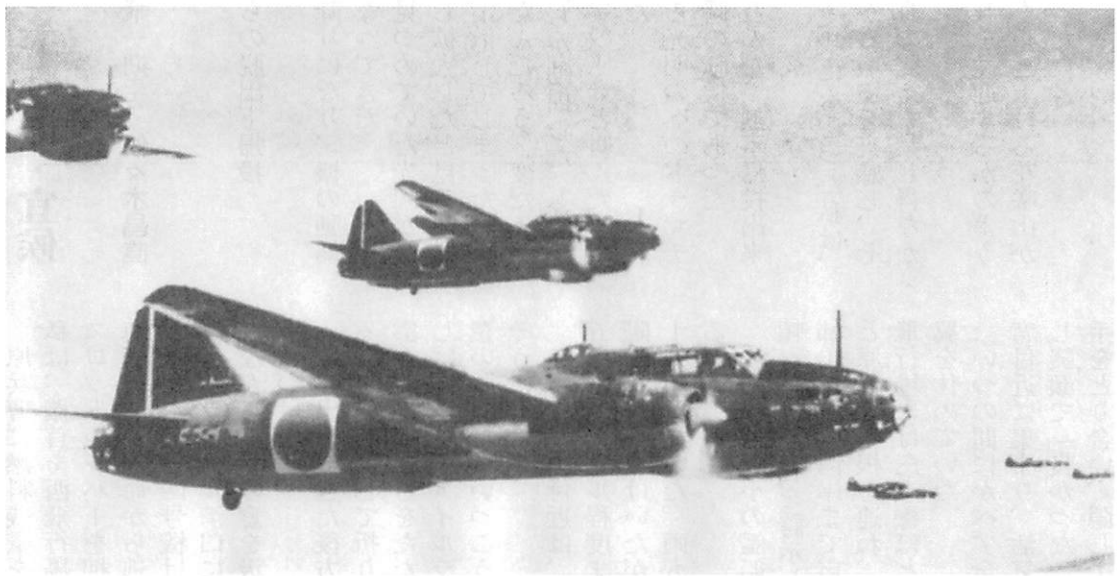
「直行で滑走路へ入ってください。燃料がギリギリなようです」と原兵曹が言ってきた。

湾を抜けて椰子林の台地に入ったころから、小糠雨が降っていた。視界に影響をあたえるほどではなかった。

間もなく機はブナカナウ基地上空に達した。無風状態を示す吹き流しを見て、進攻方向最短距離の北方から着陸コースに入った。

そのとき、速力計や高度計がぜんぜん機能していないことを改めて視認したが、特に不安はなかった。エンジン音が速力計の代用をして、私にスピードを指示してくれるし、視界さえよければ高度計も不用であり目測でことたりる。

通常の離着陸では、ほとんど計器を見ていなかったことを、



このとき私は明確に知ったのである。悪い慣れである。

飛行場は降り続いたスコールの物凄さを語るように、水はけのよいはずの火山灰滑走路全面が、湖沼のように水をたたえていた。

いつもより幾分グライドスピードを上げて着陸したが、水とブレーキの相乗効果で行き足の止まるのが早かった。

列線間近にして燃料切れか？エンジンが停止してしまった。空中だったらえらいことになっていたにちがいない。思わずゾーッとした。

迎えの車が、水をかき分けて機の側へ着いた。

昇降口から降りようとしたが足下は水が結構ある。すかさず若い兵隊が駆け寄り車まで背負ってくれた。

「佐々木よく帰った、ご苦労、心配したぞ」

声をかけてくれたのは、ゴム長靴をはき雨合羽を着てわざわざ出迎えにきてくれた私の直属分隊長の小林国治大尉（海兵61期・十七年五月七日サンゴ海海戦で自爆戦死）であった。

思いもよらない分隊長の恩情に私は恐縮すると同時に感動した。

「ご心配かけて申し訳ありません」というのが精いっぱいであった。

私が想像していた通り基地では、三七四号機は、不時着か雲中遭難では？と、悲観的推測をしていたということであった。

指揮所では、森玉司令はじめ各幹部が心配して待っていてくれた。

報告を終わった私は、幹部たちのねぎらいの言葉と裏腹に、自分の軽挙妄動が反省され、いい知れぬ悔恨呵責の念が一気にのしかかり、私はいつになく疲労を感じた。

『謎』を解く・和尚の言葉

暗黒の渦巻く乱気流にもてあそばれ、空中分解寸前の機をたて直して、その上、機位と方向を見失い、加えて飛行計器の機能さえ喪失してしまった機に、進むべき安全な方向をあたえてくれた不思議な力！

そして、洋上不時着直前の機を、安全地帯まで導きつづけてくれた奇怪な一つの灯！

ついに、それ等の謎をできぬまま、私はラバウル基地を去らねばならなかった。

昭和十七年九月末、わが「四空」は相次ぐ消耗により「死空」と化す運命をたどり、戦闘部隊としての能力を失墜してしまい、兵力の再建強化のため、木更津に後退を余儀無くされたのである。開隊後、七ヵ月半の短命航空隊であった。

帰還して間もなく、私は休暇で北海道の故郷へ帰った。

『不可解な力と奇怪な灯』の謎が解け、私が納得できたのはその時であった。

「男は軍人……」と依枯地なほどに固執し、心情として私を育てた父は、早くから家督としての私を当てにせず、養女を二人育てていた。一人は私より三つ年上で一人は四つ下であった。姉は病弱で病院通いが多かったのを私は知っていた。妹は現在東京調布に健在である。

帰郷して仏間に入った時母が姉の死をはじめて私に告げた。

位牌を見たとき、私は思わずハッとした。死亡年月日が、私がラバウル基地から初の哨戒任務に出た日と前後しているのである。

私は、両親に当日の模様を話し、不思議でならなかった『謎』のことを説明した。

妹も加わり三人は私の話しを緊張の面持ちで聞いていた。

私が語り終わるとすかさず母が、「加代姉さんはお前が横須賀航空隊に行ってからずっと朝晩、神や仏にお前の無事をお願いしていたんだよ、床につくようになってからも、自分のこと以上にお前のことを気にかけていたのも、きっと姉さんがお前を助けに南の国まで行ったにちがいない、身代わりになってくれたんだね」と言って涙した。

私は、仏前に合掌し姉の冥福を心から祈った。

翌日、私は母を伴って菩提寺を訪ねた。姉の回向を済ませ、庫裏に招かれて茶の馳走あずかった。私は和尚にせがまれてし

ばし実戦談をしなければならなかった。

話が一段落したとき、私は例の『謎』の次第を話し、和尚に仏法上の見解を伺ってみた。

「それは間違いなくお姉さんが守護神となってあなたをお救いになったのです。

そのようなことはよくあることで私たちが毎日安穏に生活できるのも同じ理由で、肉体は消滅しても霊魂は現世に在ってそれぞれに守護してくれるのです。

あなたは長生きするでしょう。いつもお姉さんが守ってくれていますからね」

と、和尚は荘重な声音で答えてくれた。

今まで、私の脳裏にくすぶりつづけていた『謎』がようやく氷解し、わが目からうろこが落ちる思いであった。

エピローグ

最近とみに〝霊界〟守護神〟心霊写真〟等の〝霊〟に関する話題が聞かれるようになり、マスコミ界でも一つのブームなっている。

この未知の分野を究明しようと、各国間の超心理学や心霊科学の学者たちがグループを組み、物理面の解明に努力をつづけているといわれている。

中でも、ドイツの医師や心理学者からなる七人のグループは、既に「霊は確実に存在するし、物理的にも説明できる」と、断定的に発表しているのである。

このような〝心霊界〟の現状を知るにつけても、私が体験した一事は、一層努力に裏づけされ確信をもてるのである。

四十五年を経た今改めて、姉が執念の『力+アルファ』と『一つの灯』に姿を変えて、私を守ってくれたと素直に信じたい、信じなければ姉の死を冒瀆することになり、死の間際まで、私の無事を願っていてくれたという姉に申し訳ない。

現在私が健康でいられるのも姉に負うところが多いと感謝し、仏前にすわる度にその思いをこめて合掌している。

終

私の昭和史

海原会会員
平乃　八代子

終戦と同時に始まった筆者の大東亜戦争、それは母と妹を連れての逃避行、これまで誰にも語らなかった戦争の真実を、戦後七十年の時を経て今語る。

第一章　序章

私は大分県大分市で紳士服店を営む岩崎家の、一男二女の長女として、満州事変が始まった一九三一年に生まれました。

昭和９年頃の大分市街地

当時の日本は、一九二九年にアメリカから発生した世界恐慌の大波をまともに受け、大不況に喘いでおりました。特に農村では仕事がなく、長男は家を継ぐことができましたが、次男三男は生活がなりたたない状況でした。このため、政府が打ち出した満州国への移民政策に呼応して、多くの若者が大陸に夢を馳せて海を渡って行きました。

私の叔母夫婦（父の姉夫婦）も、早くに満州国に渡り洋裁の特技を生かし、吉林省新京（現在の中華人民共和国吉林省長春市）で日本軍や地元の知名士相手に手広く洋服店を営んでいました。

そんな叔母夫婦の誘いで、私達家族もそろって満州へ移住することになりました。しかし、当時私はまだ四歳で、弟が産まれてまだ百日目でもあったことから、ひとまず父一人で渡満し、後日家族を呼び寄せることとなりました。そのため、残された私達は母の実家に身を寄せ、祖父母たちと一緒に生活をすることとなりました。

あの日、まだ幼い子供たちを

連れて、母は涙こそ見せませんでしたが、父との別れの辛さは子供の私にも十分感じ取れ、二歳違いの妹と泣きながら大分駅を出発する父の姿を追った思い出は今でも忘れることはできない私の辛い別れの初体験となりました。

母の実家は、別府湾に面した浜町という場所にあり、地元で大きな網元を営んでおりました。祖父母を始め叔父、叔母の大所帯でその家は子供の私にはまるでお城のように見えたのを憶えています。祖父の仕事は、朝まだ明けきらないうちからの人（漁師）集めに始まります。

私は、朝早くから祖父の後を着いて回りました。一網漁が終わって漁船が大漁旗をなびかせながら帰ってくる、浜はまるでお祭りのような騒ぎです。陸揚げされた魚は早速その日のうちに魚市場でセリにかけられます。また、自宅横の工場では、五右衛門風呂のような大きなお釜で、収穫した「やさら」（貝の一種）が湯でられ行商の叔母さんたちが三々五々リヤカーに積んでは町中を売り歩く、そんな活気に溢れた毎日に父の居ない寂しさも徐々に薄らいでいきました。そうして、二年があっという間に過ぎ私は地元の小学校に入学しました。

母の末の妹（叔母で名前は敏江）は、私とは五歳違いでいつも一緒に遊んでくれました。私が小学校に入ってからも六年生だった叔母といつも一緒に遊んでいました。そして、その年齢の近い叔母が将来私の人生に大きく拘わってくるとは、その時は考えもしませんでした。頭がよくて美人であった叔母は、幼かった私の一番の自慢でした。

私が小学校三年の時、弟が風邪こじらせてあっけなくこの世を去っていきました。そのあっけない死は夢の中のような出来事で、私にはなかなか理解できないものでした。弟の死を契機に、子育てに自信を無くした母が、私と妹を連れて父の居る満州へ行くことを決心したのは、弟の一周忌の後、一九四十年春四月の頃でした。それから間もなく、満州への渡航の日取りが決まると、自慢の叔母は母と私と妹の三人を別府に遊びに連れて行ってくれました。

そしてその数日後「姉ちゃんも後から行くから泣いちゃダメ」と笑顔で大分駅を満州へと旅立つ私達家族を見送ってくれました。桜の花びらがハラハラと舞い散る日本出発でした。

大分駅

二章　満州へ

田舎者三人の初めての旅行が、朝鮮半島を通り越しての満州までの旅となり本当に心細いものでした。大分駅を出て東舞鶴までは列車で移動、翌日は舞鶴港から船上の人となり次の日には釜山に到着し宿泊、翌日一路列車で新京へと向かいました。

右は新京市街地

マーチョと呼ばれた１頭立馬車

満州鉄道新京支社ビル

釜山から新京に向かう車窓からの景色は、まだ所々に雪が残った茶色の味気ない平野が、行けども行けども続くのみでした。

当時父は、新京の店を任されており、仕事の合間をぬって新京の駅まで迎えに来てくれていました。

駅前でマーチョという、馬で引かれた乗り物に妹と二人で乗った時はとても不安でした。当時、新京の町は日本の東京に例えられる大都会でした。

田舎者の私達家族には見るもの全てが驚きの連続でした。数日して、吉林の本店に父に連れられて四人で渡満の挨拶に行くことになりました。本店に着くと、挨拶もそこそこに伯母から予想外の話が告げられました。

「四人の子供たちが満州の気候に合わず、病気ばかりするので家族全員で帰国しようかと思っている。そのために、既に大分県の別府に家も購入したので、そこで住むように考えている。ついては、現在父が取り仕切っている新京の支店を他の人に譲って経営をを頼みたい」という内容でした。私は、翌日入院中の従弟達四人を近くの病院に見舞いました。従姉弟達との初対面が全員病院の中とは、私も妹も風邪が原因で幼くして亡くなった弟の事を思い出し、自分たちも同じようになるのではあるまいかと、不安でなりませんでした。

第三章　吉林での生活

吉林は、満州の京都と言われ、北に北山（ペーサン）の山並み、松花江の大河が流れ広々としたいかにも満州らしい大地でした。

本店は、駅前の一等地に建つ三階建ビルの一階で、二階、三階は日本人が旅館を経営していました。広々とした駅前広場は中国人の物売りの声で、まるで朝市の様ににぎわっていました。満鉄（満州鉄道）の駅ビル、公園、満鉄の社宅、ホテルや大きな料亭や旅館等が軒を連ねる大馬路という広々とした大路が駅前から町中へと通っていました。私は、この年の春小学校五年生として吉林在満国民学校に入学し、二年間の小学校生活を経て、吉林高等女学校へ進学することとなりました。

当時の満州は日本人の天下でした。気候は北海道と同じくらいで五月にはいろんな花が一斉に咲きだし、夏の木陰は涼しくて、氷売りの少年が木陰で昼寝をしてしまい、売り物の氷が水となり「アイヤー、メンワーズ」（あらら―。お手上げだ。）可笑しいやら可愛いやら、黄色いマクワ売りの声、値段は此処の言い値、小ぶりのリンゴの味は忘れられません。

そして十月には一夜にして、白一色の雪景色、広い道が月の光にキラキラとして、その道をマーチョが車夫の「チョッチョッ」という調子に合わせて鞭で馬の首の鈴をシャンシャンと鳴らしながら行きかう。別の世界を見ているようでした。

環境に直ぐに馴染む私には、子供心に満州はいい所だ、来て良かったと思いました。

時を同じくして、太平洋戦争が始まりました。しかし、満州の生活には、戦争の影すらなく、何でも手に入り戦争どこ吹く風で、勝った勝ったの声すら聞こえてきませんでした。

本店は、店舗と日本人職人の縫製工場で、続く奥が私達の住まいでした。他に、中国人の職人の工場が二か所あり、満鉄の仕事が主体でしたが、時々軍服を着た人の姿を見かけましたので、時には軍関係の仕事も有ったんだろうと思います。

中国人の夫妻が職人の賄いや、家の手伝いに通って来ていまし

た。

冬はスケート、学校の運動場が一夜でスケートリンクに早変わりしたのにはビックリ、先生方の頑張りでした。北山でのソリ遊びは雪まみれで気温は零下だというのに汗が流れました。その頃の私は、運動後の汗の始末がうまくできなくて、よく風邪をひいて学校を休んでいました。

そんな日は一日中、布団の中で、吉屋信子（一八九六年～一九七三年）の小説「七本椿」を何度も繰り返し読んでいました。窓から見える空を白い雲が流れていくのが面白くて、飽きずに見ていました。

学業成績のほうは、数学は不得手で試験はいつも欠点でしたが、歴史、図工、手芸は得意でした。毎朝五時過ぎ頃にカーンコン　カーンとボイラーの火入れの音がして、シューッとスチームの暖かい音が聞こえて来ます。何もかもが新鮮な毎日でした。

国民学校の修学旅行は日露戦争で乃木将軍とステッセル将軍との停戦条約が締結された水師営の会見場跡にある棗（ナツメ）の木や、撫順の露天掘りの炭鉱を見学しました。でも、それらの思い出だけが満州での楽しかった思い出として残る事になろうとはその時は夢にも思いませんでした。小学校卒業までの私の満州でした。

水師営の会見場にあるナツメの木

第四章　吉林高等女学校

憧れの吉林高等女学校の入学時の制服は国民服となり、スカートはもんぺに変わり、教科書も英語が中国語に変わり、戦時色が日に日に濃くなっていきました。二年生の時は、朝から鉢巻き姿で鍬を担いで空き地に「ヒマ」という油になる苗を植え、運動場はキャベツ畑と化し、毎日袋に割り箸でキャベツに寄生する青虫を取って廻りました。「なびく黒髪きりりと結び、今朝もほがらに朝露踏んで・・」と女子挺身隊の歌を歌いながらの行進は、勉強嫌いの私には楽しい日々でした。

学校の講堂は無水飯なるものを入れる箱作の場となり、何かの油と豚の血なるものを混ぜた液体の悪臭には苦しめられました。

でも、最前線で戦っている兵隊さんの事を思えば我慢できました。手も顔も血だらけのようになって、お互いに笑い合って頑張っていました。

学校の行き帰りには馬糞を拾って歩き畑に蒔いたりもしました。その頃から教員室には、腕に十字の腕章をつけた兵隊さんの出入りが激しくなり、上級生は看護婦の勉強が始まり、私たちは次は紙風船なる何に使用するのか分からない物に塗布する、揮発油のようなものの悪臭にフラフラになりながら講堂の床を這いまわって作業しました。三年になった時、妹が一年生として入学してきました。私達はその年の五月から二か月間、開拓団への学徒動員となり、女学生三人男子校生二人の五人編成で、各家々に配属されることとなりました。勤労奉仕の内容は、地平線まで続く畑で種まきの作業でした。

広い畑に点々と農家があり、私の配属先は老人女子供ばかりの家庭でした。男子は馬を引き、女子はその畝に種を落として足で土を被せる作業でした。

朝早く三本の畝の前に一人ずつ並び、腰に種が入った袋、背中に弁当と水筒の姿で作業が始まり、六時間ただ黙々と行動し、昼に弁当を食べ、そこから、次の畝の前に立ちもどる。

一日三人で六本の畝、見渡す限りの畑と戦っての二か月を真っ黒になって頑張りました。

吉林の駅には両親と妹が迎えてくれ、逞しく日焼けした顔を満足そうに見る父、女の子がと心配する母、飛びついてくる

妹、まるで出征兵士の御帰還のようでした。

友達と「また明日学校でね」と、それぞれが懐かしい我が家へと心を躍らせました。

次の朝、校門前の集合で、校長先生から「良く頑張りましたね。今から賞状を授与します。」「先生によくお顔を見せてください。」

それはまるで黒んぼ大会のようでした。なんと二等賞の栄えある賞はこの私でした。そしてこの日が校長先生との最後のお別れとなってしまいました。今思い出しても胸のつまる思いがします。

第五章　教練そして戦争

「全員講堂に集合せよ。」との教室の張り紙に「また、あれか」と思いながら講堂に行くと予測どおりそこには私達の机が並び、軍事訓練の始まりとなりました。その頃、先生方は職員室の単なる住人となり、代わって軍医殿が先生となって看護訓練、外科の手当て、副木の当て方、消毒液による手当等に始まり「担えタンカ」の教練までが行われ、七・八月の暑い盛りで、顔はますます黒くなり、その動作はまるで男の子のようになっていきました。

その頃になって、上級生の姿が校内に無いことに気付きました。全員が従軍看護婦としての学徒動員で北支に出発していたのです。

四十才過ぎの父に赤紙（招集令状）が来て、新京の部隊に入隊となり戦争の足音がザクザクと近づいてきているのを、いやがうえにも体感するようになりました。

八月の中旬頃になって傷病兵がどんどん運びこまれ、教室は野戦病院となり、私達は何処でこんな戦いがあったのかもわからずに、夢中で走り廻りました。

先生方も炊き出しで、お握りを作ったり、軍医殿に叱り飛ばされながら昼夜なく働きました。何が何だかよくわからないまま、それぞれが出来ることに必死でした。

傷病兵は、何故か皆少年のように若くて、年下の私達の方が姉のような気さえしました。

新京にあった関東軍司令部

「水、水を」の声、傷は深く、軍医の数は少なく痛み止めの注射を次々にするのみであったようにみえました。

正規の赤十字の看護婦の姿は見当たりませんでした。私達は習ってほやほやの止血や、消毒液をかけるだけの傷の手当でしたが、立派にお役に立てたと今でも思っています。声もなく生き途絶える人、出血多量の兵隊さんが手に写真をしっかりと握り締めて静かに息絶えていきました。

「痛い痛い、母さん母さん」と手を高く上にあげる人、だれの目にも軍歴の短い兵隊さんなんだなと思えました。

この頃になって北の方の戦線での出来事ということが分りました。満州には強い関東軍が誇っていたのに、居るのか居ないのかその姿は見当たらなくなっていました。親と思って抱きついてくる兵隊さんには、良く頑張ったねと抱き締めて一緒に泣きました。

私達だって俄か仕立ての看護人、生身の人間の最後に立会い平然と対応が出来るでしょうか。「そこの生徒」と名指しされて叱られると「煩い黙れ」の声がどこからか飛ぶ「軍医を睨み付けて、蹴飛ばしてやりたい。」の友の声を聞いた時、鳥肌がたちました。

自分達の置かれているこの場の異常を怖い事と感じない自分

に怖さえ感じました。
何日かして、久し振りに校内放送が流れました。
「戦争は終わりました。今後どうなるか分りませんので家のほうで待機していてください。日本は戦争に負けました。天皇陛下のお言葉です。」
嘘だという思いと、なんでもいい戦争が終われば又昔のような暮らしができる。本当にその時は負けて悔しいとかではなく、助かった父も帰ってきてくれる。赤十字の約束があるはずだから傷病兵も助けてもらえると信じていました。
戦争に負けた事の本当の怖さを知らない、知らぬが仏の私だったのです。その時はまだ、家の周りはいつもと変わらない穏やかな雰囲気でした。

続く

(公財)海原会寄付者芳名簿

(敬称略)(単位千円)

五　金塚まさえ(一般)東京
五　後藤田哲朗(甲11)神奈川
五　福本　貞之(乙21)静岡
五　谷口　五郎(一般)神奈川
五　秋山　孔孝(一般)千葉
五　蛭田　章(乙24)茨城
一〇　白鳥　栄(乙24)茨城
五　古屋　利雄(乙20)山梨
二〇　浅見　清(特9)埼玉
五　安部　節夫(乙22)東京
五　中里　徳司(甲15)神奈川
五　高瀬龍太郎(一般)茨城
五　宮田　幸一(甲14)神奈川
一〇　伊藤かおり(一般)神奈川
一〇　藍原　幸栄(一般)福島
五　池　太郎(一般)愛知
五　栗田林太郎(甲15)埼玉
五　豊岡　昭(甲16)東京
五　高部　博(甲13)東京
五　房宗　啓(甲14)岡山
五　石嶋　彪(甲15)東京
五　清野喜三郎(乙?)山形
五　大川　恭男(一般)茨城
一〇　(株)小笠原荷役商事(一般)埼玉

海原会へのご芳志
誠に有難うございました。

事務局日誌

三月
五日
OB会幹事会
於　阿見町中央公民館
酒井副理事長、平野理事
篠田理事、木下監事が出席
十一日
武器教導隊長訪問
於　武器教導隊
雄翔園内池の浄化作業について平野事務局長が依頼
十六日
雄翔園内池用井戸
ポンプ交換作業
於　雄翔園
地元業者により交換作業を行い、平野事務局長が立会。
二十五日
総務部長訪問
於　武器学校
慰霊祭の実施要領について、平野事務局長が報告
四月
十四日
海原会所蔵庫棚移動作業
於　所蔵庫
所蔵庫内の模様替え作業のため、所蔵品の一部を移動
徳永支部長、行方副支部長、湯原支部員、平野事務局長が参加
十四日
特定費用会計監査
於　つくばカーサ
特定費用準備金の令和元年度の会計監査を行った。
酒井副理事長、平野事務局長、木下監事が出席
十六日
令和二年度監査
於　海原会事務局
出席者　酒井副理事長、安井副理事長、平野事務局長、豊岡監事、木下監事
十六日
四月理事会
於　海原会事務局
出席者　菅野理事長、酒井副理事長、安井副理事長、平野理事、徳永理事、篠田理事、豊岡監事、木下監事、脇田参与、山下参与

「予科練」第459号7・8月号
昭和53年7月26日第3種郵便物認可（隔月奇数月1回1日発行）
令和2年7月1日発行
編集人　津島　裕
発行人　菅野寛也
発行所〒140-0013
公益財団法人　海原会
東京都品川区南大井6―16―12
（大森コーポビアネーズ）
郵便振替　00140―9―54332
☎○○三―三七六八―三三五一
FAX○○三―三七六八―三三五二
定価500円

お墓

首都圏多数の霊園・寺院墓地をご案内致します。

東京都・足立区
舎人浄苑
在来仏教

0.90㎡～
東京都より公益霊園の認証を受けた、舎人公園近くの都心でも希少な好環境の霊園。

東京都・港区
高輪メモリアルガーデン
在来仏教

0.45㎡～
都心の緑あふれる閑静な住宅街の霊園。環境・価格ともに大好評の立地です。

東京都・町田市
町田いずみ浄苑フォレストパーク
宗教不問

0.90㎡～
緑豊かな武蔵野・横浜みなとみらいを一望し、四季折々の花が彩る好環境の霊園。

東京都・八王子市
東京霊園
宗教不問

3.00㎡～
四季のうつろいに永遠の時を刻む、行き届いた景観と設備の公園墓地。

お葬式

家族葬から社葬まで、おまかせください。

花で送る家族葬

ご家族だけで、または親しい方だけで気兼ねなく送りたい。そんな想いにお応えする10名様程のプランです。花祭壇は「風」と「癒」の2種類から選べます。

10名様用
会員価格　580,000円～（+税）

自社総合式場から提携斎場まで、豊富な式場をご案内できます。

- おおのやホール小平　携帯・PHS OK 通話無料 0120-57-2222
- フューネラルリビング横浜　携帯・PHS OK 通話無料 0120-40-0785
- 常光閣斎場（千葉）　携帯・PHS OK 通話無料 0120-03-5005
- セレモ埼玉営業所　携帯・PHS OK 通話無料 0120-79-8008

お仏壇

ライフスタイルに合わせた祈りのかたちをご提供します。

海原会会員の皆様へは、墓石・葬儀（祭壇費用）・お仏壇を会員特別価格にてご提供させていただきます。お気軽にご相談ください。

お墓　墓所工事 **10%割引**
お葬式　祭壇価格から **20%割引**
お仏壇 **25%割引**

お問合せは、海原会事務局へ ☎**03-3768-3351**

株式会社メモリアルアートの大野屋は
甲飛十四期生　元海軍一等飛行兵曹　大澤静雄の次男　大澤静可の経営する、お墓・お葬式・お仏壇までご利用いただける会社です。

大野屋イメージキャラクター 市田ひろみ

メモリアルアートの大野屋

大野屋テレホンセンター
葬儀のご依頼（緊急ダイヤル）24時間受付
「仏事・葬儀・お墓に関するご相談　(9:00～20:00)」
携帯・PHS OK 通話無料 **0120-02-8888**

メモリアルアートの大野屋
http://www.ohnoya.co.jp

全優石 全国優良石材店